

台湾 F-16V の相手は J-10C/D

漢和防務評論 20181006(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

台湾空軍は 140 機以上の F-16 を AVIONICS を中心にグレードアップする計画があります。

現在の改修ペースを維持すれば、2023 年にそれが完了するとのこと。一方の中国空軍戦闘機も、レーダーを ACTIVE PHASED ARRAY RADAR にグレードアップしつつあり、主力 J-10 シリーズ戦闘機に THRUST VECTOR ENGINE を搭載する計画があるようです。

中国空軍は、今後、台湾の F-16 戦闘機の改修がどのように進展するか強い関心をもって見ていると思われま。

KDR 東京特電：

不可解なのは J-10C の生産速度である。成都の第 132 工場において、今年 2 月から 6 月の間、まとまった数の J-10 は発見できなかった。1 月には 6 機の J-10 を発見したがこれはおそらく C 型であろう。このように見ると、今年まとまった数の J-10C が生産されるのかどうか？もし生産されなければ、C 型は B 型と同様に生産機数は多くはなく、過渡的な型に終わることを意味する。”完成された” J-10 の出現を待つのか？それはスラストベクター (TVC) エンジン搭載の J-10 であり、J-10D と命名されるかもしれない。WS-10B エンジンに TVC を取付ける作業は、開始されてから、すでに長い時間が経っている。これは 360 度の回転方式である可能性が極めて高い。しかし回転するブレードの長さはロシアの AL-31FN エンジンに比べて短い。今年の年末になれば、J-10 系列の生産動向がおおむね把握できるであろう。

中国航空工業界の技術進歩は極めて速い。これが J-10B の生産機数が少なくなった理由である。中国空軍の規模から見れば、J-10A は大量生産された戦闘機とは言えない。

J-20 の生産速度はなぜ、遅いのか？KDR は何度も分析したので、ここでは繰り返さない。

今年 6 月、ロシア空軍は、12 機の SU-57 を導入する契約書に署名した。これは実戦部隊に配備される最初の SU-57 である。

現段階で中国空軍の配備の主対象は台湾であり、特に AESA レーダーに改装された F-16V を念頭においている。台湾の 143 機の F-16 すべてがグレードアップされる。今年、最初の F-16V が完成し初飛行した。全機の改装が終了するのは 2023 年であり、最初のグループの 4 機が改修のため工場に入った。このよう

に計算すると、台湾空軍は2019年から毎年28機のF-16Vを受領することができる。最も重要な改修点は、AN/APG-83型 AESA レーダー、デジタル化された AVIONICS、統合 HMD システムへの改修である。この種のレーダーに関する説明は少ない。メーカーの記述によると、APG-83 は AN/APG-77/81 の多くの技術を使用している。後者はそれぞれ F-22、F-35 に採用されているレーダーである。

中国空軍は、J-10C、J-20 から AESA レーダーに換装している。ある説によると、J-16 も AESA レーダーが搭載されているとのことであるが、写真等で示されたものはない。装備時期から見ると、可能性がある。5年後には、J-20、J-16、J-10C/D の数が台湾空軍の F-16V の数を超える。

F-16V の導入に伴って、台湾空軍は、AIM-9X (中国空軍の同種ミサイルは PL-10 である)、先進的対レーダーミサイル (J-10C はすでに YJ-91 を装備している)、JDAM 型 GPS 誘導爆弾或いは JASSM 巡航ミサイルの獲得を希望している。これで F-16V の戦闘力は2倍になる可能性がある。

全体的に見て、双方の戦闘機技術は、世代としては同じであるが、運用能力、機能の点から見れば、米国製のものが上であると KDR は見ている。しかし台湾の F-16 が最近頻繁に事故を起している状況から見ると、機体が老朽化しているのではないだろうか？台湾空軍の F-16 は、輸入した当初は特殊な機体であった。主翼、尾翼は F-16C の材料を採用し、機体構造、胴体は依然として BLOCK-15 すなわち F-16B の機構であった。就役して20年、すでに延命時期に達している。F-16V に改装すると、作戦重量はさらに重くなる。今後機体が耐えられるかどうか？大きな問題になるであろう。

機動性から見ると、現段階の J-10C は F-16V に相当する。カナード翼を効果的に利用すれば J-10の方が優勢かも知れない。後者は新型エンジンに換装されていない。これが J-10D を急いで開発する理由である。一旦 TVC エンジンを装備すると、理論上は J-10D の機動性は F-16V よりも高くなる。

J-11A とタイ国空軍の SAAB グリペン戦闘機の演習を見ると、フルデジタルのグリペンの方が技術水準が上であった。ステルス性能に欠ける J-11A は、先に探知され、その後先進的な AMRAAM 中距離空対空ミサイルによって直ちに攻撃された。したがって中国空軍が大量に装備する J-10A/B は、F-16V に比べて優勢であるとは言えない。膨大な装備の数量は恐るるに足りない。過去に何度も行われたアラブとイスラエルの戦闘ではアラブ国家の戦闘機の方が数をはるかに多かった。訓練センターにおいては、一般状況下では主として戦術対抗訓練を行う。滄州の訓練部隊は、作戦部隊である。直接ベトナム方面に出撃した記録がある。

生産時期から見ると、J-16、J-10C の AVIONICS はフルデジタルのはずである。或いは少なくとも部分的にデジタル化されている。現在 J-10C を装備しているのは、少なくとも2個旅団ある。それに訓練センターの J-10C を加えると、全部で60機となる。今年、フルデジタルの AVIONICS を搭載した機体の数は、数字の上ではすでに F-16V を超えている。5年経過しても台湾が新たな戦闘機を導入していない場合は、AESA レーダーを装備する作戦機の数に中国に比べ

大幅に劣ることになる。

KDR は J-16 の最初の機体が鼎新訓練センターに進出したことを報道した。最初の J-16 旅団は改編後第 9 旅団となった。J-16 の機番号は、7807X、701XX、であり、このように見ると、少なくとも 3 個の作戦部隊を編成していることになる。控えめに計算しても J-16 はすでに 50 機前後に達している。J-16 が搭載しているのは PL-10、PL-15 空対空ミサイルである。主要な用途は、SU-30MKK から任務を引き継ぐことである。

航空兵第 2 師団の SU-35 は、IRBIS-E PASA レーダー、フルデジタル AVIONICS を使用し、24 機導入の計画であるが、今後 24 機を超えて輸入する可能性は排除できない。台湾の防空戦闘機は、たとえ全部 F-16V に改装したところで、数においても技術においても中国に追い付かれるであろう。

以上